



SOTO ZEN JOURNAL

DHARMA EYE

News of Soto Zen Buddhism: Teachings and Practice

峨山韶碩禪師について p1
大本山總持寺大遠忌局

大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師
650回大遠忌予修法要の報告 p5
曹洞宗國際センター

第1回ラテンアメリカ禪ミーティング p13
大城仙芳

坐禪への脚注集 (7) p18
藤田一照

法
眼

Number

34

October 2014

大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師について

大本山總持寺大遠忌局

この原稿は、日本国外で厳修された大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師650回大遠忌予修法要において、大本山總持寺大遠忌局からお越しいただいた各講師により講演いただいたものです。

[講師]

ヨーロッパ国際布教総監部：前田道孝大遠忌局
勸募副総務

南アメリカ国際布教総監部：伊藤清悦大遠忌局
参拝部長

北アメリカ国際布教総監部：村瀬法英大遠忌局
総務部長

ハワイ国際布教総監部：大津豊隆大遠忌局
法要部長

本日ここに、大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師650回大遠忌予修法要が、皆様の報恩の念を結集して盛大に奉修されましたこと、感慨深く有難いことであります。

インド、中国と伝わった正伝の仏法は、高祖道元禪師様によって日本へ伝えられ、孤雲禪師様、徹通禪師様を経て、大本山總持寺を開かれた太祖瑩山禪師様に綿密に伝えられています。大本山總持寺二祖・峨山禪師様は、太祖様からその正法を受け継ぎ、それとともに總持寺の住持を42年間お勤めになり、その整備・運営へのご尽力によって、總持寺の確固たる礎を築かれたのであります。

まず、大本山總持寺御両尊大遠忌法会について、お話申し上げます。

(大遠忌法会)

二祖峨山禪師650回大遠忌と太祖瑩山禪師700回大遠忌とは、祖師や故人の功績を偲んで、亡くなられた後、長い年月が経ってから行う法要のことです。通例としては、50回忌以降、50年ごとに行われます。

曹洞宗では、永平寺、總持寺両大本山の各々の開祖・二祖様の法要を、特に大遠忌と呼びます。

(二つの大遠忌 御両尊の偉業に学ぶ)

大本山總持寺では太祖瑩山禪師と二祖峨山禪師を一体として「御両尊」と尊称しています。



香積台前の大遠忌パネル

来る平成27(2015)年に二祖峨山禪師650回大遠忌、平成36(2024)年に太祖瑩山禪師700回大遠忌が行われます。それぞれを単体の事業として捉えず、約10年にわたり「御両尊大遠忌法会」として、み教えの「相承」を軸にさまざまな行事を執り行なってまいります。

創建以来、常に人と社会と真摯に向き合い、總持寺の礎を築き曹洞宗のさらなる発展に尽くされた御両尊。その足音に耳を澄ませるとともに、今日、そして来るべき未来の僧伽の足音にしっかりと耳を傾けます。

(ご生誕)

峨山禪師のご生誕からお話いたします。

峨山禪師の両親はとても信心の深い方でありました。特にお母さまは、なかなか子どもが出来なかったの、一心に文殊菩薩へ「どうか子どもが授かりますように」と祈られていました。そして、或る晩、文殊菩薩が剣を呑む夢を見てお母さまは懐妊され、子どもの誕生を心待ちにしていたご両親の喜びは大変なものであったでしょう。そして、月が満ちて玉のような大きな男の赤ちゃんが誕生したのであります。この子が後の峨山禪師であります。

この出生話は、總持寺開祖の瑩山禪師の出生話とよく似ています。瑩山禪師のお母さまもなかなか子どもに恵まれず、村にある観音堂に熱心にお参りをして懐妊されたと言われています。

峨山禪師の子どもの時の名前は判っておりませんが、信心深い両親に依って暖かく育てられ、美しい故郷の山や清らかな流れの小川などを遊びまわり、たくましく賢い男の子として育っていきます。

峨山禪師の生まれた場所は、「瓜生（うりゅう）」とあって石川県と富山県の県境に近い、現在の津幡町というところ。そして、峨山禪師の育った時代は、日本の鎌倉時代の終わり頃でした。峨山禪師は11歳のときにお母さまに連れられて天台宗もしくは真言宗のお寺に入ってお寺の小僧となり、16歳のときに比叡山に登って修行を始められました。

(瑩山禪師との出会い)

瑩山禪師との出会いについては、峨山禪師が比叡山に入り修行と勉学に励んでから6年後、瑩山禪師という優れた禪僧が京都に滞在しているとの噂話が、禪師の耳に入り、瑩山禪師という禪僧がどのような方か興味を持ち、禪師の滞在してい

るところを訪ね、さして、問答を挑みました。

「私が比叡山で学んでいる天台宗の教えと、貴方の言う禅の教えは同じなのではないですか」と問いました。

これに対して瑩山禪師は、答えることなく、ただ微笑んでいるだけでした。峨山禪師は瑩山禪師の微笑みの意味が解らないままに、瑩山禪師のもとを去り比叡山に帰り、峨山禪師は、以前にもまして修行と勉学に打ち込み、修行に打ち込みながら、瑩山禪師の微笑みを真意とは何か、真の仏道とは何かを考えつづけます。こうして比叡山で更に2年の月日が流れ、どうしても心に満ち足りないものが残り、迷いから抜け出すことができません。そして、思い切って比叡山を去って、瑩山禪師のいる加賀、現在の石川県金沢市にある大乘寺に赴くのであります。

(修行、両箇の月)

大乘寺の瑩山禪師を訪ねると、瑩山禪師は喜んで峨山禪師を迎え入れてくれたのであります。禪師は、「あなたは将来曹洞宗を支える大切な人材なるとみています。是非曹洞宗の僧になってください。」と言い、峨山禪師はこの言葉を受けて、天台宗から曹洞宗へ変わったのであります。それからの峨山禪師は、大乘寺で厳しい修行生活に入り、仏道の道を深めていきます。

その頃の逸話が残っています。

瑩山「さて、あなたは月が二つあることを知っているか」

峨山「いいえ、わかりません」

瑩山「月が二つあるということをわからなければ、私の禅の後継者となることはできないよ」

というお話です。

修行の未熟さを知った峨山禪師は、以前にも増してひたすら修行に励みました。そうして2年が過ぎたときのこと、26歳になった峨山禪師

がいつものように一心に坐禅をしているとき、瑩山禪師が背後からそっと近づいて、耳元でパシッと指を鳴らしたのです。峨山禪師はこのとき豁然と悟りを開かれたのです。それは長い夢から覚めたかのようでありました。

峨山禪師が両箇の月をどのように悟られたかは記録に残っていませんが、一つの月は全世界を照らす月であり、もう一つの月は仏のように自分自身の心の中にある月のことでありましょう。瑩山禪師も峨山禪師の悟りを認められ、自分の後を継ぐのは峨山禪師であるという確信を強くしていったのであります。

峨山禪師は悟りを開かれた後も、引き続き瑩山禪師のもとで修行に励んでおりましたが、見聞を広めるために31歳の時に諸国修行の旅に出ます。峨山禪師の諸国行脚は全国各地に及び、多くの人との出会いがありました。こうして、峨山禪師は2年間の諸国行脚の後、大乘寺に帰ります。やがて瑩山禪師は大乘寺を明峰素哲禪師に譲り、加賀に浄住寺を開きます。

また、能登酒井の地、現在の羽咋市酒井町付近に土地の寄進を受けて永光寺を開き、このとき峨山禪師も瑩山禪師を支えて永光寺の開創に力を尽くすこととなります。

(總持寺の開創)

瑩山禪師は永光寺を開いた後、能登を中心に曹洞宗の教えを広めるために積極的に活躍をしてまいります。まもなく、能登の諸嶽寺という真言宗のお寺を譲ってもらい、曹洞宗に改めて總持寺と名付けました。

瑩山禪師は總持寺を開いてから3年で峨山禪師に住職を譲って永光寺へ帰り、そして、瑩山禪師はその翌年に永光寺で62歳で亡くなられています。

(總持寺の基盤確立)

峨山禪師は49歳で總持寺を受け継いでいます。總持寺は瑩山禪師が後醍醐天皇から「曹洞出世の道場」の綸旨をいただくなどしていましたが、まだ伽藍も整えられておらず経済的基盤も弱く、曹洞宗の教えを全国に広めていくためには、峨山禪師の力量に期待されることとなります。

峨山禪師のもとには全国から五哲、二十五哲と呼ばれる弟子たちが集まります。五哲というのは、太源宗眞・通幻寂靈・無端祖環・大徹宗令・実峰良秀で、それぞれ總持寺境内に普蔵院、妙高庵、洞川庵、伝法庵、如意庵という五院を構えて總持寺を運営します。

峨山禪師は瑩山禪師の著した『瑩山清規』を弟子たちが全国へ布教していく際に持参させて、そのみ教えを広めていきます。

また、總持寺の住職を務めながら、永光寺の住職も兼任することになりました。このときの逸話が「峨山越え」とよばれるものです。峨山禪師は總持寺と永光寺の両方のお寺の朝のお勤めをするために、真夜中に永光寺のお勤めをして、總持寺まで52キロの山道を駆け抜けて總持寺へ到着しお勤めをされるというものです。總持寺では峨山禪師の到着を待つ間、「大悲心陀羅尼」をゆっくり読経しました。そして、到着するとお経の速さを普通の速さに戻します。この独特の読み方は現在でも「真読(しんどく)」と称して毎朝總持寺の朝のお勤めで行われているものです。

(門下の育成と業績)

峨山禪師の門下からは二十五哲といわれる弟子が輩出されています。

また、五院による輪番住職制を行い、これは、五院の住職が交代で總持寺の住職となるものがあります。峨山禪師は、「私の門下の者で五院の住職が總持寺を住職するものとする。大切な案件はみんなで相談して協議してきめること」

と述べられ、一門が結束して總持寺を運営していかなければならないことを定めたのでした。

この輪番住職制は峨山禪師のあと、太源宗眞禪師から始められ、1870年に輪番住職制が廃止されるまで、504年間続けられ、住職の数は5万人近くにのぼったのでした。この輪住制は總持寺の発展に大きな役割を果たすとともに、總持寺の門前町を形成し大いに賑わしたのであります。

(入寂)

峨山禪師はこのように總持寺の基盤を確立するのに活躍しましたが、次第に体調をくずし、ついに貞治5(1366)年10月20日に弟子たちに見守られながら91歳でご遷化されます。

その最期の言葉、遺偈は「この世に生を受けて九十一年、夜になったらもとのようにあの世に旅立つこととしよう」というものでした。

残された著述として『山雲海月』、『甘露白法語』などがあります。

(相承)

最後に、師匠から弟子へ代々仏法を受けつぎ伝えていくことを「相承」と言います。

二祖峨山禪師は太祖瑩山禪師より正伝の仏法を相承されて總持寺の礎を築かれ、そのみ教えは二十五哲をはじめ代々の祖師方に相承されていきました。その延長上に法孫としての私たちが存在しているのです。私たちもそのみ教えを未来に相承していかなければなりません。

「大いなる足音」とは、峨山禪師や歴代祖師方の足音はもとより、私たちが伝えていく未来の僧伽の足音をも意味します。

五院・二十五哲と称される数多くの弟子たちを、細やかに接化して立派に育成することを通して、宗門が全国に発展していく基盤をしっかりと固められます。

このたびの大遠忌をお迎えするにあたり、「相承」ということが発揚されております。お釈迦様から歴代の祖師方、両祖様、そして峨山禪師様へと相承されたみ教えは、脈々と私たちのもとにも受け継がれております。私たちもそのみ教えを未来に向かって相承していかなければなりません。なおその際に、私たちは今日に至るまで、どれだけの遇い難い御縁によってそのみ教えを相承しているのか、そして、社会の混迷、人心の不安が今後ますます懸念される将来に向かって、私たちは身心を挙してみ教えを一体どのように伝えていくのか、ということは今一度自ら深く問い直し、考えていただきたいと念じます。



「相承」江川辰三禪師ご揮毫

本年の予修法要を契機として、峨山禪師様のご遺徳をなお一層讃え申し上げるとともに、み教えが絶えることなく今日まで嫡々と受け継がれてきた、無窮なる慈恩の大きさと、それを未来に向けて伝え続けていく責任の重さも、ぜひしみじみと噛みしめて、明年の大遠忌御正當をお迎えいたしたいと存じます。

最後に今般の峨山禪師650回大遠忌予修法要の奉修を、重ねて衷心より感謝申し上げます。

大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師 650回大遠忌予修法要報告

曹洞宗国際センター

峨山韶碩禪師は健治2(1276)年、能登国羽咋郡瓜生田（現在の石川県河北郡津幡町字瓜生）にお生まれになりました。正安元(1299)年、24歳の時、瑩山禪師の門弟に入り、以降、師に従い修行に励み、曹洞宗発展に傾倒され、貞治5(1366)年、91歳にて入寂されました。

峨山禪師についての講演が海外の予修法要の際に行われ、講演内容を巻頭ページに掲載しておりますのでご参照下さい。

峨山禪師のご遺徳を偲び、650回大遠忌法要が来年大本山總持寺において奉修されるのに先立ち、今年は日本各地9ヶ所をはじめ海外4地域の国際布教総監部において予修法要が勤められました。本誌では海外で開催された予修法要の報告をいたします。

ヨーロッパ国際布教総監部

日程：2014年5月17・18日

場所：フランス共和国 禅道尼苑

日本国外における最初の大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師650回大遠忌予修法要は、フランス共和国ブロア市近郊の禅道尼苑において厳修されました。

曹洞宗国際センターからは、南原一貴主事、伊藤祐司書記の2名がフランスへ赴きました。

総監部の事務所があるパリから車で約2時間の禅道尼苑が会場となるため、総監部において仏具等の準備や打合せを済ませた後に現地へ向かいました。禅道尼苑では頂相(ちんそう)の作成や本堂の荘厳などをするとともに、絨毯が敷

き詰められた本堂での法要であるため、畳に見立てた大きさにマスキングテープを貼り、課誦位を明確にし、行道を潤滑に行えるようにしました。

17日の午前中はヨーロッパ各地から参加した国際布教師による総監部協議会が開催され、午後からは南原主事の指導のもと、参集した総監部管内の国際布教師20名と約60名の宗侶で進退習儀が行われました。その間に曹洞宗宗務庁の砂越隆侃出版部長をはじめ、大本山總持寺より岡本俊一副寺老師、前田道孝大遠忌局勸募副総務、廣澤道秀大遠忌局勸募課長が到着され、進退習儀が終わったところで、翌日の献供出班法要において導師をお務めになる砂越部長が五盃三拝をされました。続いて午後5時より、特為献湯諷経をフォルザーニ慈相ヨーロッパ国際布教総監の導師により勤められ、法要は滞りなく厳粛におこなわれました。



特為献湯諷経

その後、場所をセミナールームに移し、前田老師より峨山禪師のご生涯とご遺徳についての講演をいただきながら、英語とフランス語の翻訳をプロジェクターで投映しました。これまで

あまり見聞することのなかった内容に、参加者は大変興味深く拝聴すると同時に、今日の曹洞宗教団の発展の礎を築かれた峨山禅師に対し、改めて崇敬の念を持たれたようでした。



峨山禅師についての講義

翌朝、未だ肌寒さの残る本堂において暁天坐禅、朝課諷経をお勤めしました。その後、法要の配役に当たった僧侶は、本堂の準備や確認をそれぞれおこなっていました。

午前10時、献供出班法要の始まりを告げる殿鐘が打ち出され、伊藤書記とセルヴァン倅川師（観照寺）によって三宝御和讃がお唱えされました。また、法要中も「大本山總持寺二祖峨山韶碩禅師讚仰御和讃・御詠歌」や「正法御和讃」などをお唱えし、法要に花を添えていました。導師である砂越部長が入堂され、その静けさも一段と増した中、つつがなく懇懃に進められていきました。

法要後、砂越部長によって佐々木孝一宗務総長の挨拶が代読され、また大遠忌局を代表して岡本老師より挨拶があり、予修法要奉修の感謝と来年の大本山總持寺への参拝案内のことばを述べられ、モス透玄ヨーロッパ国際布教総監部書記が英語とフランス語にて通訳し、2日間にわたる行持は無事終了致しました。



出班焼香



宣疏跪炉



挨拶（砂越隆侃老師）



挨拶（岡本俊一老師）

南アメリカ国際布教総監部

日程：2014年5月24・25日

場所：ブラジル連邦共和国

両大本山南米別院佛心寺

南アメリカでの予修法要は、ブラジル連邦共和国サンパウロ市の両大本山南米別院佛心寺において厳修されました。

佛心寺の本堂は平成7(1995)年に新築され、大間は畳敷きでその他の部分は板張りになっており、海外にあるお寺の中では日本の本堂に近いと言えます。また、本堂の奥には平成21(2009)年に禅堂や開山堂などを備えた大鑑閣が落慶し、朝晩の坐禅会が行われています。その本堂では、前日までに頂相や供物など須弥壇上の荘厳を整え、入念に準備が行われました。

予修法要に先立ち、24日の午前中にはブラジルを始め、ペルー、アルゼンチン、コロンビア

で活動する国際布教師が出席して南アメリカ国際布教師会議が開かれました。午後からは法要の進退習儀がおこなわれ、伝供や出班焼香などを確認しながら進められました。

特為献湯諷経の前には、翌日の献供出班法要の導師を務められる曹洞宗宗務庁の坂野浩道総務部長をはじめ、大本山總持寺からは村田和元副監院、伊藤清悦大遠忌局参拝部長が到着され、坂野部長が五盃三拝をされました。

午後6時から特為献湯諷経が采川道昭南アメリカ国際布教総監の導師により勤められ、佛心寺の参禅会メンバーを中心に約90名が参列しました。



特為献湯諷経

翌25日は雨模様の中、午前9時から佛心寺の敬老会の祈祷法要が行われ、身体健全・福寿長久が祈願されました。続いて、伊藤参拝部長より峨山禅師のご生涯とご遺徳について講演をいただきました（ポルトガル語通訳）。總持寺の礎を築かれ、多くの弟子を育てられた峨山禅師の教えに接する有難いご縁となりました。そして、このたび佛心寺本堂の左奥に整備された観音堂において、大本山總持寺貫首 江川辰三禅師の揮毫による「観音堂」額の除幕式が行われ、参列の皆様披露されました。



扁額除幕式



梅花流詠讃歌の奉詠

献供出班法要は坂野浩道総務部長を導師にお迎えして行われ、厳粛な雰囲気の中で法要が営まれました。導師によってひとつひとつ供物が供えられ、十八拜の礼拝が続けられる中、佛心寺本堂は大都会サンパウロの喧噪を忘れるような静けさに包まれました。また、佐藤正明梅花流特派師範がブラジルの梅花講員とともに詠讃歌の奉詠をされました。本堂を埋め尽くした参列者約120名は峨山禅師を偲び、未来に伝えるべき「大いなる足音」に思いを馳せました。



出班焼香



峨山禅師についての講義

法要後、坂野総務部長より佐々木孝一宗務総長の挨拶が代読され、大本山總持寺からは村田副監院が代表して予修法要奉修への感謝のお言葉を述べられ、さらに「明年の大遠忌本法要の際には大本山總持寺をぜひご参拝ください」とお話され、南アメリカでの予修法要は無事円成しました。



挨拶（村田和元老師）

北アメリカ国際布教総監部

日程：2014年5月31日、6月1日

場所：アメリカ合衆国 両大本山北米別院禅宗寺

ヨーロッパ国際布教総監部、南アメリカ国際布教総監部における予修法要に続いて、大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師650回大遠忌予修法要が、アメリカ合衆国カリフォルニア州ロサンゼルス市のリトルトーキョーにある両大本山北米別院禅宗寺において厳修されました。

国際センターからは、藤田一照所長、南原一貴主事、伊藤祐司書記が随喜しました。

5月31日は午前9時より現職研修会が開催され、南原主事の指導のもと予修法要のために法式研修を実施しました。禅宗寺の本堂内は教会風に参列者が座る椅子が設置されており、大間及び内陣にあたる部分がステージ上に置かれています。そのステージ上で法要を行うということも

あり、潤滑に法要が進むよう習儀を進めました。

午後からは研修会の続きとして、ウィリアム・ボディフォード教授（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）に「峨山禪師と曹洞宗の展開について」の講演をいただきました。一般の聴講者も含め多くの聴衆が興味深く聞き入り、質疑応答も活発にされました。

またその間、翌日の献供出班法要の導師をお務めになる曹洞宗宗務庁の砂越隆侃出版部長をはじめ、大本山總持寺より鈴木永一後堂老師、村瀬法英大遠忌局総務部長が到着されました。そして、午後4時30分に本堂の鐘が打ち鳴らされ、特為献湯諷経がルメー大岳北アメリカ国際布教総監の導師にて勤められました。



講義（ウィリアム・ボディフォード教授）



特為献湯諷経

翌日は午前9時30分から、禅宗寺の太鼓グループ「禅太鼓（ぜんでこ）」によるオープニングパフォーマンスから始まり、本堂に太鼓の音が轟きわたりました。

法要に先立ち、村瀬老師より峨山禅師のご生涯とご遺徳について、英語の通訳を交え講演をいただき、ペンを執りながら聞き入る参加者もいました。



峨山禅師についての講義



伝供

午前11時、法要の始まりを告げる鐘の音が鳴り、禅宗寺、およびサンフランシスコ桑港寺の梅花講員による三宝御和讃のお唱えが始まりました。そして、ルメー総監が先導しながら、導

師である砂越部長が上殿されました。普段とは違う法要に参列者は大変興味深く見守り、本堂内は水を打った静けさの中、水が流れるが如く進んでいきました。ヨーロッパでの予修法要と同じく、南原主事が維那（いの）というお役を務め、法要中に疏（しよ）を読まれました。「疏」とはこの法要の意義と峨山禅師のご遺徳を讃歎するものです。



梅花流詠讃歌の奉詠

法要後、砂越部長が佐々木孝一宗務総長の挨拶を代読され、正法御和讃のお唱えがされる中、退堂されました。続いて、大遠忌局を代表して鈴木老師より予修法要奉修の感謝が述べられました。

続いての檀信徒総回向では、法要の前に禅宗寺寺子屋の子ども達による献灯があげられました。秋葉玄吾前北アメリカ国際布教総監が導師を務められ、読経中には参列者の方々が焼香されました。

当日は、当総監部管内の僧侶約30名と檀信徒約100名が参集し、またロサンゼルス仏教連合会の他宗の僧侶にもご参列いただき、盛大裡に終了致しました。



挨拶（鈴木永一老師）

ハワイ国際布教總監部

日程：2014年9月12・13日

場所：アメリカ合衆国 両大本山ハワイ別院正法寺

日本、及び海外での最後の大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師650回大遠忌予修法要が、常夏の島ハワイ州オアフ島ホノルル市の両大本山ハワイ別院正法寺において厳修されました。

両大本山北米別院禪宗寺と同じような内観を構える本堂内において、日中は外気温30度を超す暑さの中、日本から随喜に来られた数名の若手僧侶と準備を進めました。

9月12日は、当總監部管内の僧侶約8名が参集し、午前9時より会議が開催され、続いて随喜僧侶も含め現職研修会として法要の進退習儀がおこなわれました。

昼食後、翌日の献供出班法要で導師をお務めになる曹洞宗宗務庁の齋藤裕道伝道部長をはじめ、大本山總持寺より石田征史副監院老師、大津豊隆大遠忌局法要部長が到着し、研修会の終了後に齋藤部長が五盃三拝をされました。

午後3時30分、本堂の鐘が打ち鳴らされ、駒形宗彦ハワイ国際布教總監を導師に特為献湯諷經が勤められました。

引き続き、大津法要部長による峨山禪師のご生涯とご遺徳について、英語の通訳を交え講演をいただきました。未だ暑さの残る本堂内ではありましたが、皆熱心に聞いていました。

その後、場所を階下社交室に移し、懇親会がおこなわれ、清興としてハワイ祭太鼓が催されました。



特為献湯諷經

翌13日午前9時30分、風もなく外の暑さが垂れ込める本堂に、ハワイの梅花講員による三宝御和讃のお唱えが響き渡りました。お唱えが終わり静まる本堂内、教会風に配された長いすの中央通路を通り、齋藤部長が上殿されました。

そして、ハワイにおける法要の特色とも言える、「南無帰依三宝」「南無帰依仏・南無帰依法・南無帰依僧」のパーリ語をオルガンに合わせてお唱えされ、心地よい音色が包み込みました。



峨山禅師についての講義



挨拶（石田征史老師）



拈香法語

法要後、齋藤部長より佐々木孝一宗務総長の挨拶が代読され、続いて大遠忌局を代表して石田副監院から予修法要奉修への感謝のお言葉が述べられ、英訳がスクリーンに投映されました。

社交室での昼食の後、僧侶、檀信徒総勢約80名が3台のバスに分乗し、日系移民への慰霊法要に出発しました。ホノルルから北西に車で約40分のところにあるケモー墓地、更に10分ほど離れたカワイロア墓地を訪れ、強い日差しが照りつける中、駒形総監の導師により展墓諷経を勤め、参加者は読経中に焼香をし、先亡者へ手を合わせていました。また、カワイロア墓地のある丘から山手に登り眼下に大海原を見渡せる場所へと向かいました。そこは、ワヒアワに移転した龍仙寺の跡地で、今でも菩提樹の大木が生育し続け、その一帯を見守っているかのようでした。

この日の参加者は、峨山禅師、日系移民と二つの足音に思いを馳せ、それらを後世に伝えていくことの大切さを改めて感じ、2日間の日程は無事に終了しました。



ケモ墓地での慰霊法要



龍仙寺跡地の菩提樹

大本山總持寺大遠忌に関する詳細は、以下の特設ウェブサイトをご覧ください。

<http://sojo.jp/>



第1回ラテンアメリカ禅ミーティング —文化の架け橋—

大城仙芳

国際布教師

アルゼンチン共和国ブエノスアイレス市
南禅寺

ラテンアメリカにおける100年以上にわたる仏教の歴史上初めてとなる禅仏教の僧俗修行者のミーティングが開催されました。それは国籍や人種、分派や宗派、指導者、法系、そして宗教の違いを問わない集まりでした。坐禅を実践しているキリスト教のグループも参加しました。

「第1回ラテンアメリカ禅ミーティング」は、2014年4月15日から20日の日程で、アルゼンチンのブエノスアイレスにおいておこなわれました。アルゼンチンやボリビア、ブラジル、コロンビア、コスタリカ、キューバ、チリ、日本、ペルー、台湾、チベット、ウルグアイ、ベネズエラからサンガや指導者僧侶や修行僧が参加、協力してくれました。

会議の目的

1. 社会全体の利益のため、ラテンアメリカに禅修行を広める
2. 地域の団体やサンガの間における相互の理解と交流を促進する
3. 将来の活動を明確にし連携する

背景

2013年にはラテンアメリカの多くのサンガは、以下の行事を通じて交流する機会があった。

1. 日本の曹洞宗から派遣された上野泰庵師による開教から110周年を記念し、その記念行事がペルーにおいて開催された¹。

2. 第2回仏教文化交流世界連盟 仏教文化と国際会議のアジアフェスティバルが、スリランカにおいて開催された。

このような理由から、私たちは母国において母国語で会議を開くことについて積極的であった。

組織者：

暫定の委員会が30人以上のボランティアによって組織された。そのボランティアは、アルジェリアの安楽寺、ビエント・デル・スール、南禅寺（以上、アルゼンチン）、大心寺（コロンビア）、瑞鳳寺コミュニティ（ペルー）、禅光寺（ブラジル）から。

協賛者：

ブエノスアイレス芸術省、宗務総局、国立東洋芸術博物館、アルゼンチン日系協会

援助金：

いくつかの活動と食事は料金を徴収した。それはこのミーティングが喜捨、慈善、そして個人やグループ、仏教・非仏教組織からの補助によって賄われているため。

聴衆：

1. 僧侶、一般信徒、研究者、学者、作家、ジャーナリスト、禅に関連する分野（武道や美的芸術、もしくは人々の健康に関わる）の指導者や実践者。
2. ほとんどか、もしくは全く仏教や禅の知識を持っていない一般の人々。また、いかなるアジアのコミュニティにも関係していない人々。

6日間のミーティングのハイライト

開講式：

藤田一照師（アメリカ合衆国・曹洞宗国際センター）、大城慈仙師（ペルー共和国・慈恩寺）、ルー・イン師（台湾・佛光山寺）、ジャンパ・テンシン師（チベット・グルンパスクール）以上、基調講演の講師として。また、特別ゲストにアルフレッド・アブリアーニ氏（ブエノスアイレス市宗務総局局長）、オスバルド・ボラス氏（国立東洋芸術博物館副館長）が参加。

オスバルド・スバナシーニ氏²の顕彰式 美術評論家であり禅とアジア芸術の広めた先駆者。

平和式典

キリスト教僧院での接心（2日間）

文化的な催し物

30以上の参加自由な無料の催し物を開催。他の組織や一般の人々と交流し、ふれあう絶好の機会であった。

- 剣道や剣術、空手、合気道、弓道などの演武
- 円卓会議：サンガをどのように組織するか？
ブラジルやペルー、アルゼンチンでの体験談や経験
- フィルム上映と聴衆との討論会：「ブッダ」
2005年にアルゼンチンで製作されたラテンアメリカ人の仏教徒についての初めての物語。「サンセットサムライ」2001年に日本で製作された剣士の映画
- 芸術的パフォーマンス：アルゼンチンと日本の民族踊りと音楽
- ワークショップ：俳句、坐禅、書道、按摩、体操、茶道

- アジアン・アート・ミュージアム、日本庭園、仏教寺院へのガイドツアー
- ポスターの展示（ラテンアメリカの各サンガから送付されてきた彼らの歴史や指導者について、また活動の紹介ポスター）
- 芸術展：書道、絵画、陶磁器、詩文
- 禅ブックフェア：ラテンアメリカのサンガやグループによる書物や冊子（スペイン語、ポルトガル語、中国語、日本語、サンスクリット語）の図書コーナーを設け、販売。講堂では、執筆者のサイン会や講演。仏教の本は絶版になっていたり、ラテンアメリカの言語に翻訳されていなかったり、版が不明であったりして、手に入れることがなかなか困難であるので、このようなブックフェアは特に重要である。



会議



朝課



ブックフェア



椅子坐禅



書道のワークショップ

今後について

ミーティングの最終日には、すべての参加者との意見交換がおこなわれた。ミーティングの評価は大変肯定的で、毎年継続していくことに全員が賛同した。そして、2015年にはブラジルのフロリアナポリスで接心をおこなうことが提案された。また、今回成功した禅ブックフェアを今後も継続していくために、チームを組織化することにした。私たちはブックフェアに興味を持つ人々や団体からの協力や意見を受け付けている。

私見

私がこのミーティングの成果を判断したり、批評したりするには十分な客観性に欠けているかもしれませんが、個人的な感想を述べさせていただきます。

1903年に上野泰庵師が日本から到着し、太平洋を跨いで日本と南アメリカの文化の架け橋をかけました。その繋がりには、修行や異なる文化や伝統の表現を通して今でも息づいています。例えば、私たちの禅堂である南禅寺においては、坐禅の後、説法よりお茶を提供するほうが好まれます。一緒にお茶をいただくことは教化ではなく言葉を越えた交流に関わるものです。

このミーティングのモットーは、“禅文化の架け橋”でした。しかし、スヴァナスキーニ・オスヴァルド氏は、「禅は、最近では多くの人々が流行のように使う言葉となってきた」と言いました。ミーティングの間、私たちはこの問題について、話し合い議論しました。それは、中国禅、日本禅、韓国禅、公案、臨済、只管打坐、応量器、それともフォークとスプーン、武道あるいはヨガ、ヨーロッパ人の法系、それとも北アメリカの人たちの法系、お唱えはキリスト教の賛美歌、それとも陀羅尼、般若心経か

ハートストラ（ポルトガル語版は言うに及ばず、スペイン語だけでも8つの異なる翻訳を展示しました）、在家あるいは出家、宗教的、非仏教的、曹洞宗か曹洞宗でないグループか、などといったテーマをめぐるものです。

この点について、南アメリカ国際布教総監部の越賀道秀師の話と彼の存在は、非常に有益でした。彼が曹洞宗の僧侶になるために必要だったことや、得度、修行の段階、そして修行に対する心構えや意義などについて詳細に話をされました。

また、もう1人の貴重なゲストである曹洞宗国際センターの藤田一照師は、好奇心があり、ミーティングの初日と最終日に、絡子を身につけた5カ国から参加した僧侶に、「南アメリカの参加者でしょ！！どうしてそのように日本的な衣装を身につけているのですか？」と尋ねました。この問いかけは、私の個人的推測ですが、教えは葉のようなもので、病気の時、それを治療するために薬を飲む、その薬は日本からだろうが、インドやパラグアイからであろうが関係ないでしょう、ということをおもひ起こしたかったのではないのでしょうか。

南米の国々には、犯罪の悪化による死、貧困による疾病、加齢による健忘症というように苦しみは多様に広まっています³。乞食やホームレスは私たちの目前にいます。藤田師と私が空港へ向かう日にも、ギャングが私たちの物をひったくろうとしました。（結局は逃げていきました）

こういう状況のため、現実的な修行、人間的な価値、教えを社会全体に向かって開放する必要があるのではないかと考えている人々がいます。しかしどのようにして？

環境や条件、カルマは日本やヨーロッパ、北

アメリカ、そしてアフリカでは違います。決まった解決策などありません。例えば、あなたが今読んでいるこの文章はスペイン語やポルトガル語では今のところ出版されていません。（つまり、6億人の潜在的な読者を失っているのです）

私たちは、この道に興味を持つすべてのグループが参加するような、議論し考えや経験をやり取りするための共通の場を設けることによって、その架け橋を拡げようと取り組んでいます。議論の窓は大きく開いています・・・合掌。

ラテンアメリカの大サンガから学んだこと

ラテンアメリカはお釈迦様のいた国からみれば、地球の反対側です。しかし、お釈迦様の教えは多くの人々を鼓舞しました。私たちはこのミーティングでお互いを知り、自分自身を知りました。

老師や僧侶、大学教授、指導者、学生、翻訳家、芸術家、警備員、運転手、塗装工、電気工、デザイナー、裁縫師など、彼らは現場やインターネットなどで大変貢献してくれました。彼らは他の用事で忙しいにもかかわらず、この6ヶ月間で延べ6000時間以上、完全にボランティアで最善の努力と気力、そして知識を提供してくれたことによって、国も違えば、宗教やサンガも違う他の人々が、お釈迦様の教えを修行し受けとることができたのです。

私たちは南禅寺サンガからのネルソン氏とロザナ氏の2名の参加者について言及し、功績を称えなくてはなりません。彼らは金銭を寄付してくれ、ミーティング期間中のソーダやミネラルウォーターといった飲み物を提供してくれました。また、彼らは毎週夜遅くまで続くミーティ

ングにも参加してくれました。さらに、大切なことを付け加えると、ミーティングの間、訪問者は無料で自由に出入りが出来るようにしていたのですが、彼らが入り口に立ってみんなの安全と安心を見守ってくれ、常に率先して奉仕し、必要とあればこれまでもやってきたように自分たちのいのちを賭けてくれたのです。彼らは2人とも警察官であり、休日返上で（つまり自分たちの休みを削って）ボランティアとして、私たちが平安で安全にミーティングに臨めるように、この役割を務めてくれました。彼らは立ちっぱなしで、接心や会議、講習会、展示会、夕食にも参加できず、また雑談をする時間すらありませんでした。それでも、彼らは疲れた表情をすることなく、笑顔で参加者を案内しお世話をしてくれました。合掌。
これらの行為は菩薩の教えです。

こうしたことの全てが、私たちがラテンアメリカにおいて何を提供し成し遂げることができるかを示す事例になっています。もう一つ学んだことは、法の種は良い種であり、この土地には肥沃な土壌と布施の心あふれる人々がいるということでした。時は熟したのです。

私たちは次回の大サンガのミーティングに参加するようにすべての人をお誘いします。そして、“第1回ラテンアメリカ禅ミーティング”の開催を可能にしてくれた、南アメリカや他の大陸からの人々や団体からなる大きなコミュニティに協力してくれることを感謝します。

仏法が広まり、すべての衆生に功德をもたらしますように。

深い敬意を込めて 合掌

第1回ラテンアメリカ禅ミーティング執行責任者

Venerable⁴大城仙芳

Contact: zenamericadelsur@gmail.com

http://zenamericadelsur.wix.com/puentedeculturas

facebook: zenamericadelsur

¹ “ペルーにおける仏教伝道のはじまり” 曹洞禅ジャーナル「法眼」12号 (2000年8月)

² オスバルド・スバナシーニ (アルゼンチン、1928～現在) 1950年代からアジアの芸術や文化を学び、それらをスペイン語で執筆した先駆者。「Conceptos sobre el arte de Oriente」(1964)、「Sesshuy la pintura Zen」(1965)。国際芸術協会のメンバー。瑞宝章受賞。

³ アルゼンチンの現実：
上位40の大都市においては、2013年から2014年にかけて全世帯の37.1%が少なくとも一度は犯罪被害に遭っている。(Torcuato di Tella University調べ)
人口の27パーセントは貧困ライン以下である。(Argentina Catholic University調べ)
退職者の80パーセントは、年金では必要とする経費の半分しか賄えない。(Buenos Aires Ombudsman Office調べ)

⁴ 政府によって公式に支援されている宗教であるローマ使徒教会が大半を占めるアルゼンチンのような国では、“Reverend”で自分自身を紹介することは、論争と誤解を招くことが多い。“Venerable”はアジア圏以外の仏教宗派で使用される用語である。この点についてのコメントを歓迎する。



坐禅への脚注集(7) 坐禅の「難しさ」1

藤田一照

曹洞宗国際センター所長

わたしが昔、アメリカで坐禅の未経験者グループに坐禅の指導をした時の次のようなエピソードを紹介しよう。

坐禅のやり方をなるべく詳細に説明し、実際に坐禅をしてもらったあと設けた振り返りの時間に、彼らは表現こそ違いが口々に「坐禅は難しい」という感想を述べた。彼らの口ぶりからは、坐禅が難しいのは「やっぱり予想通りだった」というニュアンスが感じられた。と言うことは、初めての坐禅を実際にやる前から、彼らは既に「坐禅は難しい」という期待(?)、予想を抱いていたということなのか?どこでどうやってそんな坐禅についての先入観、独断を持つようになったのだろうか?当時のわたしはそんなことを考えながら、彼らにこう言ったのだった。



「どうやらみなさんは坐禅というのはきつくて難しいものだという印象をはじめから持っていたようですね。そして今、実際にやってみた

ら、まさにその通りだったというわけですね。でも、今みなさんがやったような坐禅を日本に伝えた道元禅師という方は『坐禅は安楽の法門である』、つまり坐禅は安らかで、楽な世界への確かな入り口だと言ってるんですよ（ここでみんな笑う）。いやこれはジョークでもなんでもなくて本当にそう言ってるんです。ですから、もしこれを文字通りに受けとるとすれば、みなさんがさっきまで坐っていたきつい、苦しい、痛い坐禅は坐禅じゃないことになりますよね（またみんな笑う）。でもわたしには今日みなさんが安楽に坐っていた瞬間が確かにあったように思えるんです。それは、わたしが始まりの鐘を鳴らした時『ああ、きれいな音だなあー』とみなさんが坐禅することを忘れて思わず聞きほれていた最初の十数秒間と、終わりの鐘が鳴った直後の「フー、やっと終わったー」とホッとした時です（みんな大笑い）。それは『言われたとおりの坐禅をしなきゃ』ということをつかり忘れた時であり、『もう坐禅しなくていい』と坐禅から解放されたときですね。つまり『坐禅をしなれば』ということがまったく念頭にない時、安楽の法門がそこに一瞬ですが確かに開いていたわけです。これはどういうことなのでしょう？もちろん、わたしとしては始まりの鐘と終わりの鐘の間もそういう瞬間が30分ずーっと続いてほしかったのですがね。でも初心者のみなさんでも、安楽の法門としての坐禅がちゃんとできていた瞬間が確かにあったということは、是非確認しておいて欲しいんです。思うに、みなさんが初心者だったからそれが余計にはっきりとした形で示されたんです。ですから、坐禅は慣れないからできないとか慣れたらできるとかというような慣れの問題ではないと思うんです。今のわたしにはうまく言えないのですが、そういうこととは全然別な、もっと

大事な、坐禅にとって本質的なことがそこにはあるような気がします。そのことに気づかせてくれたみなさんとの出会いに心から感謝します・・・」と。

「坐禅をやるう」として頑張っていないとき、図らずも(皮肉にも?)そこに安楽の法門が開いていた・・・。こういう出来事があったのはずっと前、20年以上前のことだ。そのころのわたしはこういうことを言うのが精いっぱいだったのだが、今ならどうだろう？その時わたしが「慣れの問題ではない」と言い、「全然別な、もっと大事な、坐禅にとって本質的なことがそこにはあるような気がします」とほのめかすだけに終わった「そのこと」を、今はもっとクリアに語れるだろうか？わたしの初めての単著である『現代坐禅講義—只管打坐への道』（佼成出版社）は「そのこと」をめぐって、あれからいろいろ考え、試してきたことをわたしなりの表現でまとめようとしたものなのである。

坐禅を「難しいもの」と思い込んで教える人がいて、坐禅を「難しいもの」と思い込んで習う人がいる。だからほんとうに坐禅が「難しいもの」になってしまう。その難しさを克服しようとして頑張った分だけかえって難しさが増大していく・・・。「自己成就的予言」の実現である。こうして、「坐禅」という言葉を聞いただけで、たちまちに「難しい」、「きつい」、「ひたすら耐える」、「特別な人しかできない特殊なこと」、「自分には所詮縁遠いもの」などといったイメージがほとんど自動的に浮かんでしまう、そんな不幸な状況が「坐禅」の周りに生まれてしまっているのではないか？

しかし、ここで言われている「難しさ」の実態は単に、意識としての自己が出す指示にからだやところが素直に従わない、つまり姿勢や息や心を「坐禅における理想状態」にしようとする

る意図的努力がこちらの思い通りに運ばないということにすぎないのである。だからそれは「坐禅は技術的に習得するのが難しい」と言っているだけなのだ。もし坐禅がテクネー(技術)[1]的な営みであるとすれば、なるほどそれは妥当な愚痴かもしれない。しかし、坐禅がポイエーシス(生成的)[2]な営みであるという立場からすれば、それは坐禅に対して全くいわれのない「言いがかり」でしかないことになる。ポイエーシス的である坐禅に対してテクネー的に取り組もうとする当人の間違っただけである以上、「難しい」のは坐禅のせいではないからだ。持って回った言い方になるが、坐禅のほんとうの難しさは、坐禅を知らず知らずのうちに「難しいもの」に変えてしまう、われわれが根深いところで抱いている誤った坐禅観、誤った取り組み方を根本からごっそりと入れ替える、そういう難しさなのである。まったく的外れな思い違いから本当は難しくないことを難しいものにしてしまい、そのせいで本当に難しいことに正しく取り組めていないのではないか。もしかしたら坐禅の修行においてもそういうことが起きているのではないだろうか？

その卑近な例として、尾籠な話になって恐縮であるが、例えば大便は自分が頑張ってウンウン気張らないと出てこないと思っている人が多いが、本当は落ち着いて待っていれば自然に「息み」が起こってきて自然に気張ってスーッと出てくるのである。人のからだはもともとそうなるようにできているのに、裡で自然に起こってくる「息み」と、自分が頑張っている「気張り」とを混同しているところに大きな間違いがある。赤ちゃんに向かってお母さんが「はい、ウン、ウン」と言って顔を赤くして一生懸命に息むことを教えていることが多いが、これ

は実は間違っただけの排便のやり方を教えているのである。赤ちゃんには誰かから教えられなくても、自然から与えられた排便の能力がもともとあるのに、お母さんの余計なお節介のせいでせっかくの自然な排便の感覚（それは快感のほうである）が損なわれてしまい、ウンチをすることが大仕事に、下手をすると難行苦行にすら変質してしまうのである。ウンチは自然に楽に出てくるものだ。それを何が出させないようにしているのか？余計な気張りをするからかえって出ないのである。自分の頑張りや外から加える力の働きばかりに目を向けて、裡の働きがあることをすっかり見逃しているからである。

同じことは出産にも言える。妊娠期間をちゃんと過ごして時が来るのを待っていれば自然に息みが出てきて、赤ちゃんはそれに乗ってスラッと産まれるものだ。それなのに、産む当人も周りもみんなウンウン気張らなければ産まれないものだと頭から決め込んでいる。お産は危ない、すごく痛いものだ、医者に頼らなければ産めない・・・そういう間違っただけの、偏ったお産のイメージがそれに拍車をかけている。自然な息みと無理な気張り、その違いを知らないせいで、本来軽いはずのお産がむやみと重いものになってしまう。野口整体の創始者である野口晴哉氏は「気張っているのと、自然に力が入っているとは違うのです。この裡から自然に起こってくるものと、外から加えた力の区別が分かるようになることが、生き物に接する最初の問題なのです。外から力を加えなくては力が入らないと決めている人は、物を扱っている人なのです。」

(『愉気法』全生社)と書いているが、けだし名言である。

[1] テクネー ギリシア語 テクニク、テクノロジーの語源。自然の中に隠れているもの

を人間がさまざまな挑発や狡知、つまり小賢しい知恵を駆使して外側に引っ張り出そうとする営み。

[2] ポイエーシス ギリシア語 ポエムの語源。植物の種が発芽し、やがて自然に花が咲くように、自然が自らの中に隠している豊かなものを自発的に外に持ち出してくる働き。

国際ニュース

南アメリカ梅花流特派師範講習

期日：2014年5月2日～26日

会場：ブラジル共和国 7教場

ペルー共和国 1教場

ヨーロッパ国際布教総監部主催協議会及び現地法人総会

期日：2014年5月16～18日

会場：フランス共和国 禅道尼苑

南アメリカ国際布教師会議、並びに僧侶研修会

期日：2014年5月24日

会場：両大本山南米別院佛心寺

北アメリカ国際布教師研修会

期日：2014年5月31日

会場：両大本山北米別院禅宗寺

北アメリカ梅花流特派師範巡回講習

期日：2014年6月9日～19日

会場：アメリカ合衆国 5教場



曹洞禅ジャーナル 法眼(年2回発行)

編集兼発行人 藤田一照

発行所 曹洞宗国際センター

Soto Zen Buddhism International Center

1691 Laguna Street, San Francisco, CA 94115 Phone: 415-567-7686 Fax: 415-567-0200